奈良県国語教育研究会報
第108号
発行所
奈良県
国語教育研究会
発行人
会長 橋本 宗和
事務局
吉野町立吉野小学校
吉野郡吉野町上市2298
☎ 0746－32－4333
FAX0746－32－8982

言葉を育てて心を育む教育・二

奈良県国語教育研究会
会長 橋本 宗和

一　時を重ねて

人類は、狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会と歩みを進め、第五の社会「超スマート社会」を迎えようとしています。途絶えることなく連綿と時を重ね、人々の営みは、言葉と共に積み重ねられてきました。近未来の社会を生きる子どもたちにとって身に付けて欲しい力とは、「自分の夢を自分で描ける力」です。それは「自分で考え判断し、答えを見付け行動に移せる力」だと考えています。

二　言葉の力を

人間は関係の中で生活をしているのであり、その関係性が良好であればあるほど生活の場は、居心地の良いものとなります。そのためにも、言葉を媒介として人間関係を作る力、即ち、人間関係形成能力を高める対話の指導を丁寧に進める必要があります。対話を推進するためには、共感的で受容的な包容力のある集団を育てることが条件となります。

心の動きは各々の言動として表現されます。児童生徒が衝動的な言動に走るとき、背景には不信感と不安感が渦巻き、攻撃的な言動の背景には、言語化できない不満が潜んでいます。

より質の高い関係性を求めるには、集団の中に安心感と信頼感、さらには、自律感を芽生えさせる必要があります。

他者との関係の中で相互に尊重し、高め合える言葉を自然に発することができる力、そんな言葉の力を高めていきたいものです。

三　自己有用感を

自己有用感の高まりは、人間関係の中で自己の存在が自他共に認められ、自らの表現が他者尊重の意識の中でさわやかに行われるといった現象面に見られます。

言葉を丁寧に育てることで、自己を大切にする思いと共に他者への配慮も可能となります。音声言語・文字言語のいずれにしても伝え合う活動を推進するためには、学習者が自信をもち他者とコミュニケーションできる段階にまで導くことが必要です。人は他者から認められることで自らの有用感を無意識に確かめ、その確実感が人間関係形成能力の向上につながるのです。言葉を育てて心を育むために、一人一人が大切な存在であるという実感のもてる言語環境を整備したいと考えています。

四　支持的言語と非認知能力

日常の無意識に発せられる言葉の中に、支持的言語がどれだけ活用されているでしょうか。近頃「がんばったね」「よく考えているね」「どうしたらこんなに上手くいくの」等の支持的な言葉かけが少なくなってきているように思われます。これらの言葉には、相手を心理的に援助する温かい心のこもったメッセージが含まれています。「学習意欲」「協調性」「探究心」等の非認知能力の向上を図るとき、相手の思いを傾聴し、承認を意図した支持的言語の活用を推進します。こうした教師の言語表現が、子どもたちに良きモデルを提供することになるのです。

五　言葉と心の教育を

「自分の夢を自分で描ける力」を付けるために、指示命令型の指導から脱却し、「良質な問い」を投げかけられる教育を展開する必要があります。「問い」を投げかけられた子どもたちは、「どうしたら解決できるか」と考え始めます。そこに芽生えるのが「主体的な思考」であり、その思考には言葉が伴います。「話す・聞く」「書く」「読む」それぞれの言語活動の礎となる言葉と心。言葉を育てることは、豊かな心を育むことになるのです。

秋季研究大会講師

山口大学　大学院　教育学研究科　教授　岸本　憲一良 先生のご紹介

昭和五十八年から河合町立河合第三小学校に勤められた後、昭和六十二年から香芝市立五位堂小学校に勤められました。その後、五條市立牧野小学校、同市立五條小学校を経て、平成十五年から奈良県立教育研究所指導主事となられました。平成十八年からは、山口大学教育学部助教授を務められました。

そして、平成二十四年から現在まで、山口大学大学院教育学研究科教授を務められています。なお、この間、同学部の附属中学校長、山口県立大学非常勤講師等を併任されています。現在、日本国語教育学会理事、中国・国語教育探求の会代表等を務められています。

・「『新たな学び』を支える国語の授業」（三省堂 2013）
・「表現力を鍛える説明文の授業」（明治図書 2008）
・「子どもと拓く国語科学習材・作文編」（明治図書 1999）
・「『探求読み』の入り口としての比べ読み」（『国語教育探求30号』国語教育探求の会 2017）
・「音読指導で重視したい『くらべる』と『つなげる』」（『月刊国語教育30－9号』東京法令 2010）
・「『対話のツール』、『変容の履歴』としての学習ノートを」（『実践国語研究№301』明治図書 2010）
・「『三つの対話』と『モニタリング』の組織化－」（『読解表現力強化プログラム』明治図書 2009）
など、論文・辞典執筆多数。学会・研究会などでの発表多数。

―秋季研究大会要項―

期　日
平成三十年十月三十日（火）

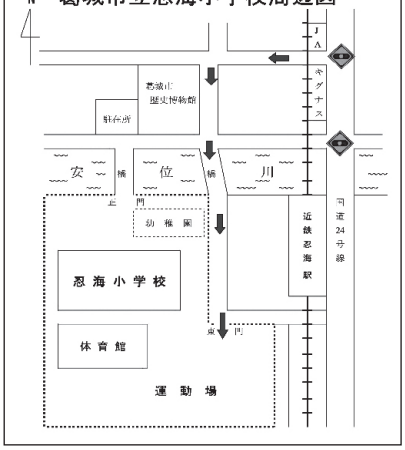
会　場
葛城市立忍海小学校
奈良県葛城市忍海三三八―一
電話　〇七四五―六二―二四六七

日　程
◇学習公開
十三時十五分～十四時

学年	指導者	単元「学習材」
二年	清水　律子	絵を見てお話を作ろう
三年	山岸　顕宏 坂田　昌代	理由が分かるように書こう 「絵文字で広めよう！忍海っ子マナー」
五年	馬場　沙知 辻本　浩	新聞記事を読んで意見文を書こう 「小学生に携帯電話は必要かどうかを考えよう」

◇実践報告及び研究協議（分科会）
十四時十分～十五時
◇全体会
十五時十分～十五時四十分
◇記念講演
十五時四十五分～十六時四十五分
演　題
『『ことば』、そして『ひと』』
山口大学大学院
教育学研究科教授
岸本　憲一良　先生
◇閉会行事
十六時四十五分～十七時

葛城市立忍海小学校周辺図



研究主題について

付けたい力を明確にし、学習過程を重視した実践による書く力の高まりを実証的に報告する

事務局　北村　拓也

さわやかな秋風が吹く季節、葛城市立忍海小学校を会場として本年度の秋季研究大会を開催することになりました。開催に向けて格別の御尽力をいただいております忍海小学校の先生方と、当日、御協力をいただく葛城市教育振興会国語部会の先生方に、深く感謝の意を表します。

さて、本会では、**「付けたい力を育む『書くこと』の学習活動の創造　～実証的な学習過程の重視～」**を研究主題とし、試行錯誤を繰り返しながら研究を深めてきました。

小学校では平成三十二年度から、中学校では平成三十三年度から全面実施となる新学習指導要領では、「何ができるようになるか」を明確化するとともに、これまでの教育実践の蓄積を引き継ぎ、児童の実態等に応じて、指導の工夫改善を図り、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を図ることが求められています。

また、平成二十九年に告示された新学習指導要領の解説「国語編」では、「2国語科の改訂の趣旨及び要点」の中で、学習内容の改善・充実についての記述があります。そこでは、新学習指導要領が、中央教育審議会答申において整理された現行学習指導要領の学習過程を踏まえ、〔思考力、判断力、表現力〕の各領域において、学習過程を一層明確にし、各指導事項を位置付けたこと、全ての領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し、「考えの形成」に関する指導事項を位置付けたことが述べられています。

また、「平成二十九年度全国学力学習状況調査の結果」（文部科学省）の中で、小学校では「目的や意図に応じて、場に応じた適切な言葉遣いで話したり、必要な事柄を整理して書いたりすることに課題がある。」とし、中学校では、「文章を読み返し、語句の使い方を工夫して書くことはできているが、根拠を明確にして自分の考えを具体的に書くことに依然として課題がある。書く目的を意識し、必要な情報を集めるための見通しをもつことに課題がある。」ことが報告されました。

そこで、本研究会では、これまでの実践を踏まえ、課題解決に向けた学習過程を重視し、今、身に付けさせたい「書くこと」の能力を高める授業研究を行いました。

まず、小学校の低、中、高学年と中学校の各部会に分かれ、「書くこと」について、児童、生徒の実態を基に、高めるべき書く能力を明確化しました。そして、学びの過程として必然性のある言語活動を吟味し、児童、生徒が主体的に、学習の見通しをもって取り組むことができるように単元を構成し、実践に取り組みました。

また、本年度は、「書くこと」の領域を扱う研究の二年目であります。昨年度の実践の成果を引き継ぐとともに、付けたい力としてねらった児童の書く力の高まりが明確になるよう、書く実践の成果を実証的にまとめました。

今回、その成果を発表させていただくことで、先生方の国語科学習の改善や国語教室の経営に少しでもお役に立てば、主催者としてこれ以上の喜びはございません。しかし、改善すべき問題も多く、御参会いただいた先生方からぜひとも御意見・御批判を賜りたく存じます。忌憚のない御意見を賜り、活発な研究討議が行われることを願っております。

《低学年部会》

児童の実態に応じた「書くこと」の学習活動の創造

水田　真充

低学年部会では、児童にどのような能力を付けたいのか、何のために書くのかといった課題と目的意識を出し合い、その力を付けるための言語活動を考えた。

本年度は、一年生の「しらせたいな、見せたいな」の学習材を用いて二つの単元を設定し研究を進めていった。

一つ目は、絵ができるまでを説明する文章を書いて「おえかきシート」を作るという活動を位置付けた。二つ目は、「いちっこ記者になって『みみなんしぜんマップ』に載せる紹介文を書く」という活動を位置付けた。

前者では、まず「おえかきシート」のモデルを提示した。そして形を表す言葉を考えたり詳しく説明したりする言葉を見付け、様々な表現の仕方を学び、文章の構成を学んで書くという活動の授業実践を報告する。

また後者では、記者になりきり、実践校の敷地内にある自然について細かい部分まで観察してメモをとり、着目する視点を明確にさせながら「みみなんしぜんマップ」に載せる紹介文を書き、全校に伝えるという実践を報告する。

《中学年部会》

見通しをもって書く学習の展開

中島　宇規

中学年部会では、児童の書く力の実態から、児童が見通しをもって書き、交流を通して読み手に分かりやすい文章を書く力を育てる必要性を考えた。そして、付けたい力の育成に最適な言語活動を選定して研究を始めた。

三年生では「食べ物のひみつを教えます」を、四年生では「『クラブ活動リーフレット』を作ろう」を学習材に、調べて報告する文章、資料を効果的に使って説明する文章を書く学習を位置付けた。

取組を進めるに際して、相手・目的意識を明確にし、児童が見通しをもって主体的に学習するようにした。また、これまでの学習を生かして、分かりやすい文章を書くために必要なことは何かを考えた。そこでは、具体例を示したり資料を活用したりすることで分かりやすい文章になると捉え、学習活動を展開した。書いた文章は推敲や共有の時間を通してよりよい文章へと仕上げる。

今年度は、取組を通して児童の書く力がどのように成長したのか、実証的に報告する。

《高学年部会》

主体的・対話的に学ぶ「書くこと」の指導の工夫

小原　聡

高学年部会では、児童の実態から「目的や意図に応じて、資料を根拠に自分の考えを書く力」を付ける必要性を感じた。その力を付けるために、言語活動の特徴を吟味し、研究を進めた。

五年生では、「グラフや表を用いて書こう」、六年生では「未来がよりよくあるために」を学習材に用い、選んだ資料を根拠に自分の考えに説得力をもたせた意見文を書く活動を位置付けた。取組を進めるにあたり、モデル文を活用して学習の見通しをもつとともに、目的意識と相手意識をもった学びが展開するようにした。同時に、文章構成や資料の読み取り方、資料を活用した書き方について、具体的な学びの視点をもたせることで、自分の考えを明確に書くことができるのではないかという仮説を立てて方策を探った。

また、ワークシートや付箋の効果的な活用方法を検討した。児童同士が対話を通して学びを深め、相互評価できる力を付けるために必然性のある交流も設定した。

自ら主体的・対話的に課題解決に向けて学ぶ「書く能力」を育成するための実践を、仮説の検証とともに報告する。

《中学校部会》

構成や配列を工夫することで、より正確に伝わる文章を書く力を付ける授業

隅岡　歩

中学校部会では、相手に正確に伝わるよう、段落構成や材料の配列を選んで書く力の育成を目指し、実践的研究を行った。

一つ目は、「遊びのタイムカプセル三十年後の後輩たちへ」と題した、説明的文章を作成する自主編成単元である。「読むこと」の学習で身に付けた構成法を、「書くこと」にいかす学習である。ワークシートを効果的に活用し、相互交流を通して対話的で深い学びを実現している。

二つ目は、「吉野山の桜の魅力」を観光客に伝える紹介文を作成する自主編成単元である。必要な情報を取捨選択し、ねらいに沿って再構築することで、主体的な学びを実現している。

両実践ともに、書かれた文章は学習後に相応の活用が予定されている。明確な相手意識と「書きたい伝えたい」という表現意欲を重視し、読み手を想像しながら、より分かりやすい文章表現の追究が展開された。

国語学力診断について

近年の児童生徒の減少にもかかわらず、多数の御採用をいただき、ありがとうございました。学力診断実施後は、全県集計に御協力ください。本年度も中学校の学力診断を休止とさせていただき、小学校のみの実施となっております。

本年度も、すべての学年において、「活用」に関する問題を提示しています。これは、知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力を診断するものです。（傍線部は、「平成30年度全国学力学習状況調査　解説資料」国立教育政策研究所教育課程研究センターより引用）

本診断についてのお問い合わせは、左記までお願いいたします。

広陵西小（〇七四五―五五―二三八八）　井岡　直人

平成三十年度　奈良県国語教育研究会

役員名簿

〈顧　問〉
谷奥　彰

〈会　長〉
橋本　宗和（田原本小）

〈副会長〉
原井　葉子（壱分小）
山邊　尚治（菟田野中）
辻井　賢次（大淀緑ヶ丘小）
稲浦　寿子（俵口小）
上北　浩平（白橿北小）
中永　和美（真美ヶ丘西小）

〈監　査〉
鳥居　浩（白橿南小）
堀之内成美（吉野中）

〈指　導〉
川西　聡弘（県学校教育課）
新子　泰夫（県学校教育課）
河合　知子（県立教育研究所）
中野　博昭（県人権・地域教育課）
豊田奈和子（片桐西小）
中島　宇規（六条小）
笹尾　美香（井戸堂小）
田口志津代（上牧第二中）
早川賀英子（畝傍東小）
岡島眞寿美（忍海小）
井岡　良太（耳成南小）

〈評議員〉
奈良市　馬場　浩行（富雄第三小）
矢追　篤人（平城東中）
松本　哲（やまぞえ小）
山辺郡　西岡　裕子（井戸堂小）
天理市　神元　聡（福住中）
大和郡山市　渡辺　肇（平和小）
楠木　健一（片桐中）
生駒市　原井　葉子（壱分小）
堀口　和行（生駒北中）
生駒郡　戸田　克典（斑鳩東小）
井谷　憲（安堵中）
磯城郡　橋本　宗和（田原本小）
桜井市　中野　智（田原本中）
谷　正年（桜井小）
山本　成顕（桜井中）
宇陀市　山邊　尚治（菟田野中）
宇陀郡　加藤　詠一（御杖小）
橿原市　鳥居　浩（白橿南小）
狩野　晃三（光陽中）
高市郡　藤本　博一（たかむち小）
大和高田市　稲葉　元則（菅原小）
岡田　潤一（高田西中）
香芝市　中永　和美（真美ヶ丘西小）
葛城市　椿本　剛也（新庄中）
北葛城郡　上山　準大（上牧小）
辻　博暢（真美ケ丘中）
御所市　吉川　洋也（御所小）
吹田　伸也（御所中）
五條市　西浦　孝子（阿太小）
吉野郡（西）　下村　倫代（十津川第一小）
住吉　邦夫（野迫川中）
吉野郡（東）　堀之内成美（吉野中）

〈理　事〉
奈良市　佐野賀洋子（富雄第三小）
池尻　雄亮（若草中）
山辺郡　高倉　敦史（やまぞえ小）
天理市　三好　青依（櫟本小）
小枝　泉（西中）
大和郡山市　小河　遥（平和小）
先田　貴明（郡山南中）
生駒市　飯田　安世（壱分小）
鍵谷　昇（大瀬中）
生駒郡　岡　桃子（斑鳩小）
山本　藍人（三郷中）
磯城郡　大山　久代（平野小）
大宮　豊（田原本中）
桜井市　可児恵莉加（初瀬小）
高松　葉司（桜井西中）
宇陀市　岡村　美穂（大宇陀小）
宇陀郡　森　貴子（曾爾中）
橿原市　野崎　美加（真菅北小）
山田　雅幸（光陽中）
高市郡　髙田　澪香（たかむち小）
大和高田市　長谷川有沙（浮孔小）
松尾　由子（高田中）
香芝市　杉原　友（香芝西中）
葛城市　堀川奈津子（新庄北小）
北葛城郡　岸本　理恵（上牧第三小）
安田　翔太（河合第二中）
御所市　安川　智子（大正小）
五條市　椿本　拓也（野原小）
吉野郡（西）　福井　照美（十津川第二小）
水野　清介（野迫川中）
吉野郡（東）　山田　真路（吉野小）

〈幹　事〉
水田　真充（畝傍北小）
垣内　有子（菟田野小）
小原　聡（白橿北小）
隅岡　歩（北　中）
津村　ルミ（昭和小）
河野　雄一（筒井小）
髙塚　力蔵（生駒東小）

〈事務局〉
坂田　喜昭（吉野小）
北村　拓也（佐保小）
井岡　直人（広陵西小）
森本　隆史（旭ヶ丘小）
石原宏一郎（平城小）
八木　由記（桜井西小）
田中　奈生（平群小）

事業計画

一　秋季研究大会
期日　平成三十年十月三十日（火）
会場　葛城市立忍海小学校
内容・公開学習（二、三、五学年）
・研究主題についての研究発表
・記念講演
山口大学大学院教育学研究科
教授　岸本　憲一良　氏

二　冬季研究大会
期日　平成三十一年二月十四日（木）
会場　県立教育研究所
内容・国語学力診断結果報告
・特別講演
文部科学省初等中等教育局教育課程課
教科調査官　菊池　英慈　氏

三　研究主題にかかわる研究・実践
（研究委員会）
主題　付けたい力を育む「書くこと」の学習活動の創造～実証的な学習活動の重視～

四　国語学力診断の作成・結果分析
（作問委員会）

五　会報の発行（第108号・109号）

六　その他
全小国研、全中国研主催の全国大会への参加など。

編集後記

今後も、県内の国語教育の動向を知る情報誌として、紙面の充実を図っていきたいと思います。御示唆、情報等おありでしたら事務局までお知らせください。（田中）